

フィリピン研修参加報告書

京都大学文学研究科修士1年 額田聖菜

今回は私にとって2回目のフィリピンへの研修でしたが、前回とはまた違った側面を見ることができたように思います。特に、今回は日本とフィリピンの関係について、考えさせられました。

技能実習生の研修施設を見学した際、まるで軍隊のように規律のある動きをする生徒たちの様子を見て、あまりの衝撃に涙が出そうになりました。確かに日本では規律やルールを大切にすることがありますが、あまりにもそれが強調した形で、おおらかな性格のフィリピンの人が日本で働くのに適した形につくりかえられていくように感じました。朝9時から夜8時まで厳しい授業と集団行動を強いられてなお、日本では最低賃金以下で日本人がしがらみがない仕事をする事になり、さらに日本で働けるのは3年だけという事実を考えると、南北格差を利用して、搾取が行われているようにも感じました。去年感じたフィリピン国内の貧困問題、労働市場の小ささ、搾取の構造化などが、今回は国際的な関係の中に現れて見えたのだと思います。

また、今回の訪問では、KTVで働く女性や、CFOで出会った結婚移民として日本へ来る女性を通して、私たちがボランティアで出会うJFCの母親について、深く考える機会となりました。そこにもやはり、フィリピン国内の貧困問題が底辺にあり、経済的に優位な日本との関係の中で、いびつな力関係が生まれているように感じました。私とほとんど都市の変わらない20代の女性たちが、すでに子供2人を持つシングルマザーとして働きながら日本人と結婚することを夢見ていたり、70歳の日本人男性と実際に結婚していたりすることは、私には健全なことのように思えませんでした。しかし、彼女たちは笑顔で働いていたり、50歳も年の差のある、違う国の男性と愛を築こうとしたりしていました。このときに感じた感情は、前回貧困地域を訪れた際、笑顔の子供たちを見受けた衝撃と同じものでした。前回はその時の感情をうまく言葉にすることができなかったのですが、今回ようやく言葉にすることができるようになりました。それは、私が受け入れることのできないような厳しい環境にあっても、それを受け入れて生きる彼らの強さへの驚き、そういった環境を受け入れさせる社会やシステムがあることへの怒り、そしてその状況を受け入れられない自分の弱さに対する情けなさが混ざり合ったものでした。今回のフィリピンの滞在中、幾度となくこのことを感じました。そして、私から見れば辛い状況に、笑顔で生きている人がいることを忘れずに、こういった現実をきちんと受け止められるくらい、強くなりたいと思いました。

ボランティアを通して子供たちと触れ合う中で、フィリピンの人々のそういった強さ、温かい心遣いや臨機応変でおおらかなところなどよいところを吸収していきたいと強く感じます。これからは私は彼らの学校生活をサポートし、彼らからフィリピン人のよさを学ぶ、そんなwin-winの関係を築いていけたら、と思います。